

平成17年(2005年) 5月20日 (第3種郵便物認可)

# 間伐材を用いた「j.Pod」

## 耐震・耐火性も強化

### 新たな「木の文化」再生へ

本学地球環境学堂の小林正美教授と鴻池組などの研究グループは、人工林の間伐材を有効活用し、耐震性も備えた木造建築「j・Pod(ジェイ・ポッド)」を開発した。この開発は本学木文化再生研究会(代表 田中克・ワールド科学教育研究センター長)も参画している。

日本は国土の三分の二が山林であり、その多くはスギ・ヒノキなどの人工林である。だが、営林業者の減少に伴って人工林は放置され、あまり利用が顧みられていなかった。小林教授らは、人工林維

持のために切られる間伐材に注目。小断面材を組み合わせて長方形のフレームを作り、二つのフレームの接合部分に鋼版を挟み、釘で結合したダブルフレームを作った。それらを並べてユニットを組み立て、建物を作った。現在、北部構内(農学部四明会事務局付近)と和歌山研究林(有田郡清水町)にモデルハウスを造っている。

田中センター長は、「これは単なる木造建築の開発にとどまらない。人工林を用いて新たな木の文化を再生し、都市と森の循環的共存システムを構築したい」と話している。



上：鋼版が挟まれてユニットが組み立てられている様子  
左：「j.Pod」の外観  
左上：内装 (於：北部構内)

ユニットを基礎単位とすることから建設は容易であり、ユニットの結合が強化されていることから木造建築物の構造的弱点であった耐震・耐火性といった問題も克服し、震度七の地震や四階建てへの対応も可能になっている。従来使われなかった間伐材を用いることで、大幅なコストダウンも

実現している。今後は北部構内に本格的校舎を建設する計画もあるという。